

# 短期大学における地域貢献としての造形講座の検討

－小学生親子対象の公開講座実践から－

山 中 慶 子

Considerations of the Plastic Arts Courses as a Contribution to the Local Community:  
From the Practice of Public Lectures for Parents and Children

Keiko YAMANAKA

長崎女子短期大学紀要 第50号 令和6年度 別刷

*Reprinted form*

Nagasaki Women's Junior College Annual Report of Studies, 50 : 10 – 19

2025

論 文

## 短期大学における地域貢献としての造形講座の検討

－小学生親子対象の公開講座実践から－

山 中 慶 子

Considerations of the Plastic Arts Courses as a Contribution to the Local Community:  
From the Practice of Public Lectures for Parents and Children

Keiko YAMANAKA

キーワード：造形表現、公開講座、地域貢献、大学の役割

### 1. はじめに

#### 1-1. 生涯学習社会における学びの場

近年、多くの場で生涯学習という言葉が耳にするようになった。この背景には、人生初期の学校教育だけに留まらない人格形成の必要性や、生きがいのための学習需要の増加が挙げられるだろう。「生涯学習（教育）」は、1965年の成人教育推進委員会でポール・ラングランが提唱した「lifelong integrated education」が語源であり、わが国でも長い人生の中で変化する社会に対応し、一人ひとりが豊かな人生をおくるための法や組織の整備が行われている。文部科学省は、平成18年版文部科学白書において、生涯学習社会とは「人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価される」（平成4年生涯学習審議会答申）ような社会であるとし、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」<sup>1)</sup>としている。

また、香川正弘によると、生涯学習とは「人々が自発的意思に基づいて、『自己の充実』、『生活の向上』、『職業能力の向上』のために、自ら学ぶ

内容を選び取り、充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習<sup>2)</sup>であり、生涯学習の場として、大学の地域連携・社会貢献を志向する理念の形成と、時代に即した学習の機会の提供の必要性について述べている。つまり、これからの社会において、人々が生涯を通して学ぶ機会を得ることができ、その成果を活かす社会の実現のために、各教育機関の知財の開放が求められているといえよう。

#### 1-2. 大学の役割

大学には三つの役割があるといわれる。星山幸男はその役割を、学生たちの教育、それを支える研究活動の保障、成果を還元しつつ人々に学習の場を提供するための地域貢献であると説明している<sup>3)</sup>。三つの役割のうち、教育活動、研究活動については、それぞれの大学において各専門分野の教員が研鑽を積んでいることであろう。しかし、学習の場を提供するという地域貢献の役割については、その意義や学習者のニーズが見えにくく、研究活動の成果を地域に還元するに至らない現状があるのではないだろうか。

小池源吾は、わが国の大学が実施している大学開放には、正課教育の開放、機能的開放、人材提供事業、施設開放、産学官連携のおよそ5種のも

のがある<sup>4)</sup>という。しかし、星山は、多くの大学で「教育」と「研究」が優先され、その背後に「地域貢献」を位置付ける傾向が、大学の内部でも見受けられる点を指摘し、こうした捉え方を払拭していくことが急務であるという。そして、大学にしかできないアカデミックな地域貢献として中核に位置付けられるものとして、「公開講座」「社会人聴講生」「履修証明社会人コース」を挙げている<sup>5)</sup>。中でも、一般市民を対象とした「公開講座」は、企画の自由度や教育内容・方法上の独創性が高いという特徴があり、各大学の特色を活かした知的財産の開放に位置づけ易いと考えられる。

### 1-3. 大学の第三の機能としての地域貢献

山本珠美によると、わが国の大学施設の公開は明治10年代にいくつか先行事例が見られるもの、おおむね明治30年代以降断続的に行われている。それは、所有する学術資料をもとに展覧会を開催する、あるいは、図書館を公開し閲覧を許可するという形をとって実施されてきたという<sup>6)</sup>。これらの形態からは、学習者自らが得たい知識を大学の学術資料の中から見つけ出すという探究的な学習の形が想定されよう。

しかし、1990年以降、教育と研究を主要な機能としてきた大学に、地域社会へのサービスが加わり、現在では一般教養や専門学術知識の提供を目的とする公開講座や施設の開放が求められるようになった。先に述べた生涯学習社会の基盤を担う場として、学びの環境を提供することが大学の第三の機能として位置付けられたといえる。そして、一般市民は、大学が提示する学習の場を基に、自らの求める知識・技能を選択して学ぶことが可能になったのである。

## 2. 目 的

本稿では、大学の地域貢献の中でも比較的自由度が高く、講師による創意工夫が可能な公開講座に着目する。本学では、地域連携推進事業の一環として公開講座の実施が行われているが、年度当初に企画され単発で実施されるものも多く、一般市民のニーズに沿っているのかの検討は十分とは

いえない。

本稿の目的の一つは、各大学で実施されている公開講座の現状を調査するとともに、保育者養成短期大学としての本学における公開講座のあり方を検討することである。二つに、現在実施している小学生親子対象の造形をテーマとした公開講座の記録から、対象者への学習効果を考察し、学習者（参加者）のニーズを明らかにすることを目的とする。

## 3. 公開講座に関する先行研究と実践

### 3-1. 公開講座の現状

仲嶺政光は、日本の国立大学86大学で開講された公開講座を調査し、公開講座のタイトルや概要分から、ジャンル分けを行っている。それは、教養講座（271講座、31.3%：おおむね学術知識の伝達を座学形式で実施するもの）、実習・実技講座（361講座、41.6%：実験やスポーツ、ものづくりなど操作的な活動を実施するもの）、語学・職能講座（235講座、27.1%：職業や生活において実用的な性格を持つモノ）の3つであるという。受講対象者は、広く一般市民を対象とした講座（658講座、75.9%）、小・中・高校生向けの講座（209講座、24.1%）である。また、高偏差値大学で教養講座を開講する割合が高く、準高偏差値大学では実習・実技講座の割合が高い。また、小中高校生向けの講座は実習・実技系で高い割合を示し、教養講座及び語学・職能講座は一般市民対象の割合が相対的に高くなっているという<sup>7)</sup>。

上記のことから、大学の特性や地域性、一般市民のニーズに合わせた各種講座が、内容・プログラム・方法・学習形態・レベル・講師・開講時期などを考慮したうえで開講されていることが推察される。

### 3-2. 小中学生対象の公開講座

前述の仲嶺の調査によると、国立大主催の公開講座の約四分の一は、小中高校生を対象としたものである。例えば、渡辺昭敬・根本忠将<sup>8)</sup>は、「色水の実験」「石鹼づくり」を通して、酸とアルカリについて学ぶことができる夏季講座を実施して

いる。保護者も含めて化学に対する思考力を養うことが目的であるという。相馬岳<sup>9)</sup>は、ものづくり教育がわが国にとって重要な教育タスクであるとし、小学生対象の勾玉づくりを、公開講座として実施している。「石を削る」といった地道な作業でありながら遊び心を持ちながら楽しめる題材として女子小学生の参加率が高いことを述べている。このような、ものづくりや理科を題材にしたものは、小学生が興味をもって参加しやすく、夏休みの工作や自由研究として適していると考えられる。

連続した講座開講として、魚住明生・喜覚駿介<sup>10)</sup>は、大学を中心に家庭・地域・企業・教育行政と連携して、ものづくりを中核としたコミュニティを構築し、全10回の「ロボット製作教室」を開講している。そして、連続講座を通して参加者が多くの課題に対応していく中で、特に「問題解決力」が育成される結果となったことを報告している。

上記のように、公開講座は大学の単独主催で開講されるものが多いが、長野市PTA 連合会では、大学で開講される講座の運営を、PTA 連合会が担う夏休み親子参加型の講座を開講している<sup>11)</sup>。講座は、2005年より開講され、科学、ものづくり、アート、ゲーム的な内容など多岐にわたり、子どもたちの体験の幅を広げる取り組みになっているという。

また、市民の生涯学習や学生と地域住民とのコミュニティの育成を目的として実施される公開講座に、神戸研究学園都市周辺5大学1高専による大学共同利用施設「UNITY」が挙げられる。

「UNITY」を利用して開講される講座<sup>12)</sup>は、それぞれの大学が個性を発揮して科目を提供しており、幅広い分野の講座が用意されているのが特徴である。パソコン講座や語学講座の他にも、趣味を深めるための場、資格取得を目的とした継続的な学びの場としての役割も果たしている他、高専の学生がサポートする小学生対象講座も開講されている。

星山は、市民に向けた生涯学習支援に求められるのは、一方的に教えることなく、自由意思

による学習者（参加者）と一緒に学習全体を作り上げていくことであるとしている<sup>13)</sup>。自由意思による参加が前提の公開講座においては、まず、対象となる学習者（参加者）が「学びたい」ものは何かという具体的な目的を把握することが必要である。そして、募集の際に興味関心を喚起し、学習者のニーズに合ったプログラムを設定することが肝要だと考えられる。

したがって、本稿では、2020年から毎年夏休み中に開講している造形をテーマとした公開講座記録から、小学生親子を対象とした公開講座のニーズについて検討する。さらに、保育者養成の授業内容と関連させた知財の開放という点から、今後の公開講座について示唆を得たいと考えている。

#### 4. 方 法

2020年～2022年に実施した3回の公開講座（小学生親子対象）の実践記録をまとめ、参加者の傾向を調査した。具体的には、参加した小学生と保護者のアンケート記述から、公開講座に求めるニーズを考察し、小学生親子を対象とした公開講座のテーマや内容の検討を行った。

#### 5. 公開講座「わくわくサマークラフト」実践結果

造形をテーマとした公開講座は、親子で参加でき、比較的時間に余裕のある夏休み時期の土日開催が適していると考えられた。よって、公開講座名を「わくわくサマークラフト」とし、毎年夏休みに連続した講座を開講することで、参加者の定着を図ることとした。

また、小学生の夏休みの工作の場としても活用でき、楽しみながら親子で学ぶことのできる場を想定した。公開講座の場所は、材料や道具準備の点から、本学図画工作室を使用した。公開講座の募集はポスターのHP掲載と新聞記事を活用し、申込み方法は電話及びメールとした。対象は小学生親子としたが、中高生や大人のみの参加も可とし、きょうだい児の参加も可とした。

造形に関する公開講座のテーマの選定においては、親子で協力して制作を楽しむこと、「作っ

たものを使いたい」という思いを制作のモチベーションにつなげることを意識した。夏休み期間の開催であるため、制作した作品を学校に持っていくことを想定し、サイズ等を検討した。また、本学幼児教育学科での造形表現の特色を活かした、幼児造形技法や素材を使用することを考慮した。

### 5-1. 「ハワイアントートバッグ&南国風エコライト」実施概要

開催日 2020年8月1日(土)

開催時間 10:00~12:00

参加者 11組(23名)(図1)

本講座は、原則親子での参加であるため、大人の援助を想定し、低学年児童にとって難易度の高い工程や、カッターの使用も可能である。これらのことから、ステンシル技法を用いたバッグの制作と、牛乳パックを使用した南国風ライト制作の2部構成で公開講座を実施することとした。

事前に応募があった参加者の年齢は、6歳~13歳と幅があり、2時間という講座の中で作品のイメージを固めていくことが困難であることが予想されたため、ハワイの絵柄をモチーフにしたシルエットイラストを準備し、絵柄を組み合わせた

自分で描いたイラストを加えたりしてオリジナルのバッグとライトを制作することとした。筆者の調査では、保育学生の造形活動(図工・美術)が嫌いな理由をとして、「思うように作れない」「作品に自信がない」「イメージがわからない」ことが上位に挙げられる傾向があり<sup>14)</sup>、造形に対して苦手意識をもった参加者の存在も想定する必要があった。したがって、イメージの手掛かりになるモチーフを準備しておくことで、公開講座での造形活動を苦手意識なく取り組むことができるのではないかと考えた。

講座の最初には、制作する「ハワイアントートバッグ」「南国風エコライト」にちなんで、ハワイに関するクイズ(場所、文化、言葉など)を行い、アイスブレイクとした。前半1時間は、ステンシル技法を用いたトートバッグ制作を行った。まず、白い画用紙の上にカーボン紙を置き、好みのシルエットイラストの外線を鉛筆でなぞることで、イラストを画用紙に転写する。それをカッターで切り取り、型紙を作成した。作成した型紙をトートバッグの上に配置後、マスキングテープで固定し、スタンプングによって彩色した(写真1)。

参加者	人数
幼児	0
低学年(1・2年)	2
中学年(3・4年)	5
高学年(5・6年)	5
中学生	1
大人のみ	5
保護者	11
計	23名

図1. 「ハワイアントートバッグ&南国風エコライト」参加者数

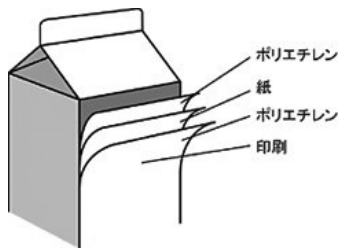


図2. 牛乳パックの構造<sup>15)</sup>



写真1. バッグにステンシルをする様子



写真2. イラストを描く様子



写真3. 南国風エコライト

トートバッグは、A4判（H310mm×W250mm）の無漂白薄地コットンを使用した。目の細かいメラミンスポンジを薄く切ってスタンプ台とし、彩色にはファブリックメディウムを1～2滴混ぜたアクリル絵の具を使用することで、布への強い定着を図った。ステンシルの際、トートバッグの中に広告紙を1枚挟むことで、絵の具が裏に染み出さないようにした。

子どもたちの中には、初めてステンシル技法を行う子もおり、慎重にスタンプする姿も見られたが、彩色後、型紙を外した時には「きれい」「すごい」「上手にできた」などの発語があった。ステンシル技法の特徴である形や色の鮮明さに驚いたり喜んだりしたことが推察された。一度、ステンシル技法を体験した後は、他のイラストで型を作成したり、同じ型で色を変えたりと、それぞれトートバッグ制作に取り組む姿が見られた。

後半は、南国風エコライトの制作を行った。光を透過させるため、開いた牛乳パックの表紙（ポリエチレンコート）を丁寧にはがし（図2）、シェードの部分とした。ポリエチレンコートの部分をはがすと、牛乳パックの表面は和紙のような質感となる。そこに、ハワイ風シルエットイラストを、

カーボン紙を使って写し取り、油性マジックで着色した（写真2）。好みのマスキングテープで、牛乳パック上下の処理を行い、3LEDプッシュライト（径98mm）の上に設置してライトを完成させた。光の色を変えたい参加者には、色のついたセロハンシートをライトに貼り付けることを提案した。

牛乳パックの表紙を剥がす工程は、低学年児には難しい様子であったが、油性マジックでシェードの模様を構成する段階では、大人も子どもも黙々と制作に取り組む様子が見られた。部屋を暗くし、ライトの光を点灯した際は、参加者から歓声が上がった（写真3）。

## 5-2. 「手作りシーサー&マリンハーバリウム」 実施概要

開催日 2021年8月8日（日）

開催時間 10:00～12:00

参加者 12組（31名）（図3）

第2回目の「わくわくサマクラフト」では、誰もが馴染みのある反面、教育の場以外では触れる機会の少ない粘土を題材として取り上げることとした。粘土は、こねる・のばす・丸める・つなぐなど手旨を使った操作で自由に形を変化させることができ、可逆操作ができるため、納得がいくまで試行錯誤を繰り返すことができる素材である。藤原逸樹は、粘土あそびの教育的意義として「身体機能や感性を高める」「創造性を育む」「科学性を育む」「情緒を安定させる」の4つを挙げている<sup>16)</sup>。したがって、本講座では、親子で粘土の感触を楽しみ、結果として形として残る作品を制作してもらうことを考えた。本講座の開催時期（コロナ禍）の社会情勢も鑑みて、沖縄地方で厄除けの意味を持つシーサーを題材とした。

2体1対のシーサーは、一般的に、向かって右側の口を開いている像がオス、口を閉じている左側の像がメスだといわれている。参加者には、どちらのシーサーを制作しても良いこと、親子で2体を制作しても良いことを伝えた。また、体勢や表情などの異なる様々なタイプのシーサーを例に挙げ、自分の作りたいシーサーのイメージを膨ら

表1. 「ハワイアントートバッグ&南国風エコライト」参加者の感想

<p><b>参加者の感想（子ども）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ステンシルがとても楽しかったです。家でもやってみたいです。</li> <li>・自分が作ったものがとてもきれいに出来たのでうれしかったです！また来たいです。</li> <li>・南国風エコライトで、色を工夫したら、こんなきれいなライトが出来ておどろいて、とってもたのしかったので、またいろんな工作をしてみたいと思いました。</li> <li>・ライトを作るのが楽しかったです。電気を消してライトをつけると、とってもきれいでした。むずかしかったけど、がんばったらいいものができました。</li> </ul> <p><b>参加者の感想（大人）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学生の子どもと久しぶりに工作をして、子どもの出来ることが増えていることを見ることができ、とても良い時間を過ごせました。ありがとうございました。</li> <li>・初めてバッグにデザインをしてみたりランプを作ったりして楽しかったです。家で使おうと思います。</li> <li>・色々なアイデア満載の作品ができました。ステンシルとか家ではなかなか出来ないのが楽しかったです。また参加したいなと思います。</li> <li>・子どもがいると、普段このような手の込んだものを作成する機会がないので、とても楽しかったです。</li> <li>・集中して自分のために工作を行うことが楽しいと思いました。素敵な作品ができました。</li> </ul>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

参加者	人数
幼児	3
低学年（1・2年）	1
中学年（3・4年）	3
高学年（5・6年）	6
中学生	2
大人のみ	2
保護者	14
計	31名

図3. 「手作りシーサー&マリンハーバリウム」参加者数



写真4. シーサー制作の様子



写真5. 瓶にオイルを注ぐ様子



写真6. 完成したマリンハーバリウム

ませることができるようにした。素材は、焼かずに自然乾燥でき、耐水性のある粘土（『ひなたぼっこ』150g）を使用した。素材として選択したテラコッタタイプは、天然の陶土が使用されており、素朴な質感が特徴である。

土台となる体、頭、口の部分は、スライドで作成方法の手順を伝えることで、制作に取り掛かりやすくなるよう工夫した。また、細部に模様を入れる時は楊枝や竹串の使用が適していること、粘土を水でゆるく溶いた「どべ」を使用することでパーツを接着できることを説明した。参加者の中には、大人と子どもで一体ずつ制作し、対になるよう、大きさやデザインなどを相談しあう姿が見られた。また、スライドや資料の写真を詳細に観察し、独特の模様やパーツを仕上げる姿が見受けられた。乾燥すると硬化してしまう粘土であるため、手を水で濡らしたり、「どべ」を活用したりしながら制作することを伝えた。1時間を超えて制作に熱中する姿が見られた（写真4）。

後半は、比較的短時間で完成する「マリンハーバリウム」の制作を行った。ハーバリウムとは、

表2. 「手作りシーサー&マリンハーバリウム」参加者の感想

参加者の感想（子ども）

- ・すなを入れるところが楽しかった。ねんどをこねるのがたのしかった。
- ・二つともうまく作れました。夏休みの工作に出したいなと思います。
- ・上手くできて嬉しかったです。シーサー作りはかっこよくできて、ハーバリウムでは魚が泳いでいるように見えました。また来たいです。
- ・作るのがむずかしかったけど、かわいくてきれいな作品が作れたので嬉しかった。早く家にかざりたい。
- ・ハーバリウムの貝がらの設置がむずかしかったです。シーサーの座布団の柄を工夫しました。

参加者の感想（大人）

- ・普段できないような工作に取り組むことができとても楽しかったです。知らない粘土やオイルを知るきっかけになりました。また参加したいです。
- ・シーサーは、粘土コネコネ楽しかったです。不細工だけど家の玄関に飾ります。親子で夏休みの良い思い出になりました。
- ・子どもとゆっくり工作などすることもないので、すごく楽しめました。集中した～。
- ・子どもの時以来に、粘土で製作しましたが、思ったより楽しめました。
- ・大人になって工作をする機会もないので、とても楽しかったです。
- ・こんなに集中したのは久しぶりでした。とても楽しかったです。

植物標本という意味で、元来は研究のために植物の状態を長期保存する方法として生まれたものである。現在は鑑賞目的で用いられるようになり、インテリアフラワーの主流となっている<sup>17)</sup>。本来、プリザーブドフラワーやドライフラワーをガラスの小瓶に入れ、保存用の専用オイルに浸して作られるものだが、本講座では生き物シールを貼ったプレートを入れ、生物が水草の間を遊泳しているように見えるハーバリウムを制作することとした。

子どもたちは、好みの形の瓶、砂や小石、水草を選んだ後、何度も透明シートに貼った生物の位置を確かめながら、様々な角度からの見え方を検討し試行錯誤を繰り返しながら制作を行っていた。専用オイルを注ぐ際は、更に慎重な様子が見られた(写真5)。制作後は、出来上がったマリンハーバリウムを机の上に置き、作品に目線を合わせて眺める姿が多数見受けられた(写真6)。

### 5-3. 「レインスティックを作ろう」実施概要

開催日 2022年8月21日(日)

開催時間 10:00~12:00

参加者	人数
幼児	2
低学年(1・2年)	5
中学年(3・4年)	1
高学年(5・6年)	5
中学生	3
大人のみ	2
保護者	16
計	34名

図4. 「レインスティックを作ろう」参加者数



写真8. 爪楊枝を爪切りで切る様子

参加者 13組(34名)(図4)

3回目の講座では、制作後も楽しめる「楽器」に着目してテーマを絞った。日常的に馴染みのない楽器であり、造りがシンプルであるものが適していると考えられたため、アフリカや中南米の楽器「レインスティック」(写真7)を制作することとした。レインスティックは、本来、枯れたサボテンにサボテンの針をさし、中に入れた小石がその針に当たりながら落ちることで雨のような音を奏でる楽器である。アフリカで生まれたとされ、南米チリでは、雨ごいの儀式に使用されたという<sup>18)</sup>。

筒の径や、使用する材料によって音色や音の響きが異なることが考えられたため、筒の直径、全体の長さ、針の材質を変えて試作を行った。それにより、径が大きいほど音は筒の中で反響し、全体の長さが長いほど音色を響かせることができることが分かった。また、針の材質は、釘などの金属よりも、木の方が素朴で柔らかい音が出せるため、爪楊枝が適していると考えられた。中に入れる素材は、参加者が音を確かめながら選ぶことが



写真7. レインスティック



写真9. レインスティックの模様を描く様子

表3 「レインスティックを作ろう」参加者の感想

<p><b>参加者の感想 (子ども)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・こんながっきがあるんだと思いませんでした。つくれてよかったです。</li> <li>・あなをあけたり、えをかいたのがたのしかった。</li> <li>・初めての作品でおもしろかった。またやりたいです。</li> <li>・デザインがとてもかわいくできたと、音がきれいだったのでよかったです。</li> <li>・家では作れないものを作れたからよかったです。また作りたい。家で早く使いたいよ</li> <li>・ビーズなどを入れるだけでキレイな音が鳴ったので、楽しかった。</li> <li>・むずかしいところもあったけど、かわいい絵やいい音になったのでよかったです。とっても楽しかったです。</li> </ul> <p><b>参加者の感想 (大人)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅で癒されたいときに鳴らしてみようと思います。親身も楽しませてもらいました。</li> <li>・子どもと一緒に楽しくできたので良かったです。また、ぜひ参加したいです。</li> <li>・楽器を作る機会はなかなかないので、面白かったです。</li> <li>・家などでは取り組めないような工作に挑戦出来て、とても楽しく勉強になりました。</li> <li>・楽器の存在を通して、国の文化なども知ることができたので良かったです。</li> <li>・毎年参加させてもらっていて、子どもと楽しく工作ができています。</li> <li>・なるほど～！！がたくさんあって、面白かった。</li> </ul>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

できるように、大小のビーズや小豆などを用意した。

試作の結果、筒は、紙管(厚さ2mm 直径45mm)を事前に50cmにカットしておき、使用することとした。爪楊枝を刺していくための穴を螺旋状にあけていくのが困難だと考えられたため、錐で跡をつけることで、穴の位置のガイドとなる印を示しておき、参加者が容易に穴をあけられるようにした。

公開講座の最初に、世界地図で南米やアフリカの位置を確認し、気候や植物について写真等を用いて説明した。その後、レインスティックを紹介し、皆で音色を聴いて制作への意欲を高められるようにした。

あらかじめ開けておいた穴に桐を刺して穴を広げ、爪楊枝の先にボンドをつけてから穴に固定する工程は、幼児や低学年児には難しい様子であった。また、筒から出た爪楊枝を、爪切りでカットする工程も、日頃使い慣れていない子どもたちには難しい様子であった(写真8)。しかし、親子で役割を分担しながら、根気よく制作を進める様子が確認された。

筒に爪楊枝を螺旋状に刺した後、ボンドを乾燥

させる時間が必要である。その間に、レインスティックの模様を画用紙に描くこととした。準備した紙は、凹凸のあるマーメイド紙(パールピーチ・ミント・グレージュ・ひまわり)である。油性ペンを使用し、好きな模様を描くよう伝えた。オルテガ柄やネイティブ柄、動物等のイラストのコピー(A4)を数種類準備し、カーボン紙で写し取っても良いこととした(写真9)。

筒のボンドが乾いたことを確認し、先端の片方に透明フィルムをセロハンテープで貼りつけた。その後、音を確かめながらビーズ(大・小)、鈴、豆等の中に入れる素材を選択するよう伝えた。子どもたちは、筒を傾けながら何度も音を確かめ、素材を選んでいった。

選んだ素材を筒の中に入れ、もう片方の先端をフィルムで閉じ、模様をえがいたマーメイド紙を巻き付けて両面テープで固定した。筒の両端をマスキングテープや毛糸で装飾し、オリジナルのレインスティックを完成させた。子どもたちの中には、自分で制作したレインスティックを傾けたり、振ったりしながら音色を楽しんだり、友達同士で音を鳴らしあったりする姿が見られた。

## 6. 考 察

公開講座3回目の参加は13組(34名)の参加であったが、そのうち、4組の親子が3回の参加、5組の親子が2回の参加であった。一度参加した親子がリピートする率が高く、事後の感想からも「また参加したい」という意思がうかがえた。

参加した子どもの感想からは、「ステンシルがとても楽しかった」、「すなを入れるところが楽しかった」、「ねんどをこねるのが楽しかった」など、制作の工程で具体的に面白かったこと、楽しかったことの記述がされていた。また、「初めての作品でおもしろかった」、「作るのがむずかしかったけど、かわいくてきれいな作品が作れたので嬉しかった」、「むずかしかったけど、がんばったらいいものができました」など、今までにない経験であったこと、難易度の高い制作でも満足する作品づくりができたことを喜ぶ感想が見られた。難しいものを保護者と協力して作り上げた達成感は、

参加者が講座を通して得た最も大きな効果であったと考える。

公開講座では、スライドによる工程の説明に加え、参加者の手元資料を準備することで詳細な確認ができるようにしている。参加者の年齢や制作のスピードによって、進度が異なるため、満足できないまま次の工程に進むことを避けるためである。また、“それらしく見えるような模様”などの例やイラストを準備しておくことで、イメージを膨らませることができ、満足する作品づくりにつながったのではないかと考える。実際、子どもたちは、イラストを参考にしたり、自分で書き足したりしながら、オリジナルの作品を仕上げていった。造形活動は、自由な創造の場ではあるが、自分の納得のいくものを作って「飾りたい」「使いたい」ことに思いを馳せることも、参加者の満足につながる要素であると考えられた。

一方、保護者の感想には、「子どもの出来ることが増えていることを見ることができ、とても良い時間を過ごせました」、「子どもとゆっくり工作などすることもないので、すごく楽しめました」、「子どもと一緒に楽しくできたので良かったです」など、子どもと一つのことにじっくり向き合う時間について書かれたものが多数みられた。2時間という限られた時間の中ではあるが、目的をもって親子で何かに取り組む経験は、保護者が子どもの成長を実感する契機となり、その後も会話を弾ませる経験となり得ることが考えられた。

3回の公開講座に共通して、高学年など一人で制作を行える場合は、保護者も自由に制作が行えるよう材料を多めに準備するようにした。その結果、「ステンシルとか家ではなかなか出来ないので楽しめました」、「集中して自分のために工作を行うことが楽しいと思いました」、「子どもの時以来に、粘土で製作しましたが、思ったより楽しめました」、「家などでは取り組めないような工作に挑戦出来て、とても楽しく勉強になりました」など、保護者自身が一参加者として制作を楽しんだことがうかがえた。このような感想から、集中して自分のイメージを形にする、自分にとってより良いものを創造する体験は、子どもだけでなく大

人にも望まれていることが推察された。

## 6. まとめ

本稿の目的の一つは、各大学で実施されている公開講座の現状を調査するとともに、保育者養成短期大学としての本学における造形に関する公開講座のあり方を検討することであった。二つに、小学生親子対象の造形をテーマとした公開講座の実践記録から、対象者への学習効果を考察し、学習者（参加者）のニーズを明らかにすることを目的とした。

大学での公開講座の取組みでは、各大学の専門性を活かした講座内容や、地域性を考慮した形態が用いられていることが明らかになった。大学での専門性を活かしつつ、いかに地域社会に求められる学びの場を提供していくかが課題となる。本学の特色を活かした講座内容、及び適した形態として、以下の点が考えられた。

- (1) 幼児造形で用いられる簡単な技法や素材を活かした造形講座を計画することで、参加者に身近な素材で表現することの楽しさを体験できる場を提供することができる。
- (2) 夏休み時期に開催することで、小中学生に工作のアイデアを提案するとともに、目的をもって親子で過ごす時間を提供することができる。したがって、夏休み期間の午前中2時間の設定は妥当だと考える。  
また、3回の公開講座から、小学生親子対象の造形講座内容について考えられたことを以下に示す。
- (3) 公開講座のテーマは、子どもがこれまでに体験したことがないもの、また日常では体験することが難しい造形（技法など）が適している。親子で協力して制作し、達成感を味わえるような、少々難易度の高いテーマが適していると考えられた。
- (4) 「飾る」「使う」「見せる」など、作品のその後に思いを馳せることも、制作のモチベーションにつながることで、子どもの感想から推察された。
- (5) 目的をもって親子で何かに取り組む経験は、保

護者が子の成長を実感する契機となり、親子の会話を弾ませる機会になり得ることが考えられた。制作のプロセスを共有することができる造形をテーマにした公開講座は、その機会になり得ることが考えられた。

- (6)集中して自分のイメージを形にしたり、より良いものを創造したりする体験は、子どもだけでなく大人にも望まれていることが推察された。

造形をテーマとした公開講座では、場所や材料準備の観点から人数制限が必要であり、事前の詳細な計画が求められる。また、子どもも大人も楽しむためには、公開講座のテーマの検討が重要である。本稿では、これまでの実践記録から、小学生親子対象の造形をテーマとした公開講座の効果を検討し、学習者（参加者）のニーズについて整理することができた。この結果を、今後の公開講座の企画に活かしていきたい。

また、講座運営にあたって、本学学生が講師補助を担うことの学びは大きいと予想される。今後は、学生の学びの視点からも講座の内容を考えていくことを課題とする。

## 註

- 1) 文部科学省, 「平成18年版 文部科学白書 第2部 第1章 1節 1.生涯学習の意義」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab200601/002/001/003.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200601/002/001/003.htm), (2024. 10. 10閲覧)
- 2) 香川正弘 (2008) 香川正弘・鈴木真理・佐々木英和編『よくわかる生涯学習』ミネルヴァ書房, pp. 2-5
- 3) 星山幸男 (2022) 「大学における生涯学習支援のあり方をあらためて問う～コロナ感染拡大防止の対応からみえてきたもの～」『生涯学習支援室年報 第22号』 pp. 25-28
- 4) 小池源吾 (2008) 安原義仁・大塚豊・羽田貴史編『大学と社会』放送大学教育振興会, pp. 180-190
- 5) 星山幸男, 註3), pp. 25-28
- 6) 山本珠美 (2010) 『生涯学習・社会教育研究ジャーナル 第4号』生涯学習・社会教育研究促進機構, pp. 25-41
- 7) 仲嶺政光 (2019) 「学術知識の開放とその価値水準—日本の国立大学における公開講座の実施状況をふまえた分析—」『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報 第21号』 pp. 39-51,
- 8) 渡辺昭敬・根本忠将 (2015) 「失敗を恐れずに挑戦しよう—小学生向け公開講座を通じて—」『化学と教育』63巻4号, pp. 184-185
- 9) 相馬岳 (2020) 「アクセサリー製作型公開講座を活用した小学生向けものづくり教育の試み」『独立行政法人国立高等専門学校機構香川高等専門学校研究紀要11』 pp. 133-140
- 10) 魚住明生・喜覚駿介 (2015) 「「生きる力」を育成するものづくりコミュニティの構築と評価— ロボット製作教室の取り組みを通して—」『三重大学教育学部研究紀要』第66巻 教育科学, pp. 191-198
- 11) 西正明・佐藤運海・川久保英樹・神原浩・竹下欣宏・林寛平・福田典子・蛭田直 (2020) 「<実践研究> 長野市PTA 夏休み親子参加型研修会での科学・ものづくりの実践」『信州大学教育学部研究論集』第14号, pp. 306-321
- 12) UNITY (ユニティ) | 大学共同利用施設 | <https://www.unity-kobe.jp/about> (2023, 5, 30閲覧)
- 13) 星山幸男, 註3), pp. 25-28
- 14) 山中慶子 (2021) 「保育学生の造形表現における苦手意識克服のための授業実践—造形表現に関する意識調査からの考察を通して—」長崎女子短期大学紀要第46号, pp. 117-132
- 15) 紙パックの構成 | [容環協] 全国牛乳容器環境協議会 <https://www.yokankyo.jp/pack/> (2024, 11, 6 閲覧)
- 16) 藤原逸樹 (2015) 「粘土あそびの指導法に関する一考察」『安田女子大学紀要』 pp. 192-193
- 17) [https://www.fujitv-flower.net/herbarium/column/trend\\_f](https://www.fujitv-flower.net/herbarium/column/trend_f) (2023, 6, 10閲覧)
- 18) [https://kids.gakken.co.jp/jiyuu/category/art/make\\_rain\\_stick/](https://kids.gakken.co.jp/jiyuu/category/art/make_rain_stick/) (2023, 6, 30閲覧)

長崎女子短期大学紀要 第50号 令和6年度 別刷

*Reprinted form*

2025